

小著『社会情報入門  
—生きる力としての情報を考える—』  
(税務経理協会) 改訂版の刊行によせて\*

村上則夫

I

人間に課せられた課題は、生き続けることである。

私たちは、人間の大切な〈いのち〉についての情報を語らなければならない。自分という存在が、いかに尊い価値のある存在であるのか、かけがえのない大切な存在であるのか、そのことを痛切に感じることができる者は幸いである。

〈生〉というキャンバスの上では、楽しさや感激、感動したことと共に、悲しみ、苦しみ、悩みさえも、鮮やかな色彩となって、豊かに描きだされる。

残念ながら、「現代」という時代は、時間の流れ方が異常に加速し、情報の“森”ないし情報の“大海”の中にいるために、周囲や周辺の雑音と騒音などに心がみだされ、ゆっくりと時間をおしまず、静寂の中で、日々のみずからの歩みを吟味し、模索し、悩み、喜び、とことん考え、気の合う仲間と語り合うという、人間の本来的ともいえる営みが不可能となっているのも事実ではなかろうか。

現代における私たちの実際の生活は、多かれ少なかれ、疲れや戸惑い、困惑や見通しのきかない出来事がふさいで、人間のかけがえのない尊い価値のある存在という真実を隠してしまい、いつの間にかみえなくしてしまうことさえある。まことに、悲しく残念なことでもある。

さて、日本では、数年前から、「人生100年時代」という言葉を頻繁に耳にするようになった。いまや、私たちは100歳まで生きることを前提に、自分自身の人生設計を描く時代にきたとあってよいであろう。そして、人間の寿命が延びれば延びるほど、〈生〉の意味や〈死〉の意味について、真剣に問う時代でもあるといえる。

\* 村上則夫『社会情報入門 —生きる力としての情報を考える—(改訂版)』、税務経理協会、2021年12月20日。  
161ページ ¥3,080 (2,800+税) ISBN 978-4-419-06843-1

すなわち、現代を生きる私たちの現実の生活が厳しく、“人が生きにくい社会”であればあるほど、では、「自分の人生をどう生きるべきか」、「どのような老いの時期を過ごすべきか」、そして、「どのように死ぬのか」を静思することは、私たち一人ひとりの人生にとってきわめて重要であり、現代に生きる人間の切実な課題であるといえるだろう。

私たちが、最も語らなければならないのは、一人ひとりの人間が、大切な一つだけの〈いのち〉をもった〈宝物〉であることを確認したうえで、豊かな生命力のあふれた人間の“生きている言葉”、人間の〈いのち〉を大切にす言葉である。

小書は、平成21年（2009年）11月に初版が出版され、今年（令和4年）ですでに10年以上を経過している。その間、初版は2刷を刊行しているが、社会情報学領域の研究や情報通信技術（ICT）は飛躍的に向上し、多彩な情報メディア機器が出現し、情報メディアの利活用の方法や手法も多様化し大きく変貌していることから、今回、小書の〔改訂版〕を機に、必要な個所についての記述や内容などを改めることにした次第である。

ただし、今回の改訂にあたり、初版以上に、日頃、筆者が見聞きしたり、思いめぐらせていることや考えていることを「随想メモ」のように文章化したため、研究書からは、しだいに遠ざかってしまった感はゆがめないが、この点については、「入門書」という書名に免じて、ご寛容にいただきたい次第である。

## II

筆者が大学教員となった昭和60年代当初のことである。

この当時は、まだ、教育現場でもパーソナルなコンピュータがようやく整備され始めた時期で、現代のように、携帯電話、パソコンやスマートフォンなどを誰もが持ち歩く時代ではなかった。

したがって、筆者が大学で一年次配当科目として担当していた「情報処理論」の授業でも、授業当初の数時間はデスクトップコンピュータのキーボードの配列とキーボード入力練習（タイピング練習）から教えていた。なぜなら、その当時は、大学に入学して初めてコンピュータのキーボードをさわる学生も少なくなく、授業内容であったプログラミングも初歩の初歩を教える程度であったのである。

大学教員としてある学会に出席した時、大学で情報関連の科目を教えているベテランの教員から、“以前は、情報関連の科目を担当すると、お前は大学で諜報部員（＝スパイ）を養成しているのか、と擲揄<sup>やゆ</sup>されて肩身が狭かった”と聞かされたこ

とがあるが、それほどに、まだ、「情報」という用語及び概念や内容、並びに、コンピュータなど情報メディアに対する社会的な理解ないし認知度も低かったのである。

しかし、その後まもなく、「情報」の概念や内容への積極的な理解が進み、その必要性が認められ、あわせて、コンピュータの社会的影響力の大きさが広く知れ渡ると、今度は情報学の専門的な研究者やコンピュータを専門とする人間が、大きな勘違いとはいえ、ややエリート的な扱いを受けるようになった。あろうことか、筆者なども、“大学で情報関連科目を担当し、コンピュータを使って情報処理も教えている”などと話そうものなら、必ずといってよいほど、“すごいですね。最先端をいってますね”と、かなり誤った持ち上げ方をされたものである。

そのためか、当時は、社会的にも「情報」、「環境」、ないし「福祉」という3つの学問分野・領域が注目され、大学の授業科目としてもその関連科目が新設されたり、この3つのいずれかの分野・領域の名を冠した新学科や新学部の設立も増えていった。

しかしながら、それは、あくまで「過去の一時期の出来事」である。

現代では、固定回線を引かず、ワイマックス（WiMAX）や4G回線を利用したモバイルワイファイ（Wi-Fi）ルーターを使ってインターネットに接続するケースも多くなっている。人間の仕事の一部を人工知能（AI）の組み込まれたロボットが肩代わりし、道路では自動運転の車が走行し、さらに空にはドローンが飛行する時代となった。パソコンのキーボードを触ったこともない、といった時代は、遠い過去の過去となったのである。

### III

さて、〈生きる力〉としての情報とは何か。

さて、ここから話題は大きく変わるが、「学問」とは何か、と問われれば、一般的には、「体系化された知識である」と答えるであろう。あるいは、「知的真理の探究」こそが学問であるという答えが返ってくるかもしれない。

〈経済学〉や〈社会学〉といった長い歴史を有する学問は、ゆるぎない理論の体系化が行われている。厳密な意味でいえば、一つの学問分野が〈学〉と称するためには、他の学問領域とは独立した研究分野・領域が確立されていなければならない。

「情報」（Information）が学問の対象となったのは、西暦でいえば1940年代以降であり、〈情報学〉という名称の学問分野が広く知られるようになったのが20世

紀後半になってからである。したがって、歴史的な観点から眺めて、〈経済学〉や〈社会学〉という学問が大学生とすれば、〈情報学〉という学問は幼稚園児という感があるほど、〈学〉としては、わりと近年にいたってから急速に展開し確立されていった極めて学際性の高い学問と考えることができるだろう。

むろん、〈情報学〉の内容は、情報学領域の研究者によって、これまで多面的、多角的に論じられているが、その分野・領域が統一されているとは言い難く、学問としての〈情報学〉は今後も活発な議論が行われることは異論の余地がないだろう。

小著の副題は、〈生きる力としての情報を考える〉であるが、副題についての筆者の考えについては、小著第1章の中で詳しく展開していることから、是非、小著自体を手にとって読んでいただきたい。

もともと、〈生きる力〉という言葉は、文部科学省が提唱している言葉であり、文部科学省では、〈知・徳・体のバランスのとれた力〉を生きる力として説明している。筆者が小著で提案している〈生きる力〉という言葉の意味は、必ずしも、文部科学省が提唱している〈力〉とまったく同義といえないまでも、基本的な考え方は大きく異なっているとは考えていない。

小著では、簡潔には、私たち人間にとって、自分の人生を、自分らしく〈生きていこうとする生命力〉、複雑な現代の社会を〈生き抜こうとする生命力〉を〈生きる力〉と明示している。本来的に、この〈生きる力〉とは、私たちが人間として存在する本源の力であり、“身体がうみ出す生命力”を意味するといってもよい。したがって、人間には、もともと誰にでも備わっており、生命を有する動物や植物などにも該当する。

しかしながら、人間の場合は、他の動物や植物と違って、〈生きる力〉としては、“身体的な力”だけではなく、人間にのみ与えられた“知性・感情・意志（＝知情意）の力”というものも備わっている。

むろん、“知性・感情・意志の力”と“身体的な力”を分離して、それぞれ別個の力として考えることはできない。すなわち、私たちの日常的な言葉の使い方としては、「体力（身体力）」のほかに、「気力」、「知力」、「精神力」などという表現であらわされていることから理解できるように、その表現方法にいろいろな違いはあるとしても、これらを総合的に整理して表現すれば、人間というのは“知性・感情・意志の力”と“身体的な力”とにまとめられ、しかも、この二つの力は切り離すことのできないものとして考えられるのである。

そして、小著の副題である〈生きる力としての情報を考える〉とは、〈現代の社会を生きていく上で必要とする人間の力を引き出し、力を強めたり高める情報につ

いて考えてみる〉という意味あいでも考えた副題である。どんなに、つらく苦しい時でも、決して負けることなく、生きる希望を失わないで生きていく〈力〉としての情報を考えると捉えてもよいだろう。

#### IV

生きているものは、つねに「呼吸」（息）のように情報を必要としている。

「情報」というものがない世界はない。「情報」のないシステムとしての社会も、そして、「情報」のない人間の人生もあり得ない。

人間が、〈いのち〉を失えば、どんな希望もどんな夢も、どれほどの理想も実現することはできないのであることは、あえて強調するまでもないが、小著では、尊厳ある人間というものの「存在」を確認し、大切な〈いのち〉の意味を見失うことなく、社会情報や多彩な情報メディアと人間の生き方やあり方との関係を軸として、各章がそれぞれ展開されている。

「社会情報」とは、人間の社会のあらゆる営みに登場するあらゆる情報のことである。人間社会を形成する基本的要素である一人ひとりの大切な人間、あるいは、あらゆる組織全体(システム)は、その質や量には違いはあるにせよ、「呼吸」（息）のように情報を必要としているのである。

今回刊行した小著〔改訂版〕は、初版と章そのものを増減することなく、下記の全7章をもって構成し、それぞれの章は2つから4つの節に、さらに各節は2つから3つの項に分けて展開している。

#### 第1章 生きる力としての「情報」

- 1 人間理解へのいざない
- 2 「生きる力」として何を考えるか

#### 第2章 「情報とは」という問い

- 1 「情報」について考える
- 2 情報の区分および諸特性
- 3 私たちを取り巻くシステム
- 4 「情報処理」という視点で考えてみる

#### 第3章 高度情報社会と発展する情報メディア

- 1 現代の社会をどのように呼称するか — 情報研究の視点から —
- 2 現代の情報メディアについての基礎的な理解

- 3 私たちとさまざまな情報システム
- 第4章 変化をもたらす社会情報化の進展
  - 1 よく聞く〈化〉とは何か
  - 2 個人・家庭生活における社会情報化
  - 3 地域社会における社会情報化
  - 4 産業・企業における社会情報化
- 第5章 〈サイバースペース〉という世界の拡大
  - 1 情報メディア・コミュニケーション
  - 2 情報メディア・コミュニティの形成と拡大
  - 3 “ヴァーチャル”と“リアリティ”の間で！
- 第6章 高度情報社会におけるいくつかの問題
  - 1 現代におけるコミュニケーションをかいまみると
  - 2 “インフォメーション・プア”というもう一つの「貧困」問題
  - 3 “情報犯罪”という名の現代の犯罪
  - 4 “情報の森”で迷子になる私たちの困惑
    - 情報過剰現象という問題について —
- 第7章 豊かな人生の物語を生きる
  - 1 “情報”の森の中で静思の時をもつこと
  - 2 人間の〈いのち〉の価値を問い直す
  - 3 深みのある人生のための生き方
  - 4 大切な人生の物語を生きる

まず、第1章では、〈生きる力としての「情報」〉というタイトルで、主に、〈生きる力〉についての展開を試みているが、この点に関しては、すでに前項でごく簡潔に解説しているとおりである。

第2章では、〈「情報とは」という問い〉というタイトルで、高校生や大学生など「情報」を学ぼうとする初心者向けに、情報とは何か、その言葉の意味内容について、また、学問（学）としての〈情報研究〉についても簡潔に解説をほどこしながら、筆者なりに「情報」を3つに区分した上で、それぞれの情報のもつ諸特性について叙述している。

〈情報学〉は、情報に関する総合研究である。したがって、情報を取り扱うどのような分野・領域を展開してもかまわないだろうが、筆者が大学で担当している授業に「情報処理論」という科目があることから、小著でも、「情報処理」という視

点について1つの節を設けている。

小著初版でも、私たちが生き続けるという人間の課題を果たすために、情報を処理する力の必要性を強調しているが、改訂版ではここをさらに強調して、「人間の情報を処理するすぐれた力、それは課題発見能力や課題解決能力、あるいはまた、イメージ力や創造的・発展的思考力を意味する」とした上で、実際に取り組んでいただきたいテーマの異なる4つの例題を提起している。この4つの例題は、筆者が実際の授業や研修会・講演会などで課題（エピソード）として取り上げているもので、読者が小著を大学などのテキストなどとして活用する際は、ぜひ、チャレンジさせていただきたいと掲載したものである。

第3章の〈高度情報社会と発展する情報メディア〉と第4章の〈変化をもたらす社会情報化の進展〉では、現代社会を「高度情報社会」と捉えるという筆者の基本的な考えを基に、社会の発展過程と急速に進展する情報メディアとの関係について、歴史性もまじえながら、情報メディアについての現代的な理解を得る内容としている。

そのような意図から、第4章では、「個人・家庭生活における社会情報化」、「地域社会における社会情報化」及び「産業・企業における社会情報化」とに、それぞれ節を設けて、その内容についての現代的、具体的な展開を試みている。

第5章では、〈〈サイバースペース〉という世界の拡大〉というタイトルで、情報メディアやネットワーク上に構築された仮想空間におけるコミュニケーションの現状やコミュニティの形成などについて展開するとともに、「仮想（ヴァーチャル）世界」の増大にともなう「現実（リアリティ）世界」の喪失の危惧についてもふれている。

小著初版が出版された当時は、今なら誰もが理解している「仮想空間」や「電脳空間」という用語が、一般的、日常的な言葉として語られているとはいえなかった。しかし、理論的な展開というよりも、インターネットの急速な拡大やゲームソフトなどの影響が先行して、とりわけ若者たちの間で、〈サイバースペース〉という言葉は日常用語の一つの単語として語られるようになったといえる。

今回の改訂版では、もはや〈サイバースペース〉という内容を展開する必要性は低く、思い切って削除することも考えたが、小著は「入門書」という位置づけで、これから「社会情報」を学ぼうとする高校生や大学生など若者たちを主に視野において執筆した関係から、あえて、第5章を残して展開内容に若干の手を加えた次第である。

第6章の〈高度情報社会におけるいくつかの問題〉では、本章題からも知れるよ

うに、私たちが生きている現代社会で生じている問題を4つの項目にまとめて、それぞれの問題とその対応策を筆者なりに提案している。

小著初版で挙げた4つの問題の項目自体は、今回の改訂版でも変えていない。初版で挙げた「コミュニケーションの質」の問題、「情報格差」の問題、「情報犯罪」の問題、そして、「情報過剰現象」という問題は、それを誰もが問題として理解しながら、現実には改善されるどころか、ますます増大し、助長され、深刻化している。いまや、これらの問題は人間の大切な〈いのち〉を脅かす存在どころか、〈いのち〉を奪う引き金にさえなっているのである。

そして、最後の第7章は、初版の〈高度情報社会の近未来を考える〉というタイトルから、〈豊かな人生の物語を生きる〉というタイトルに代え、その展開内容についても、今回の〔改訂版〕で大きく見直したため、次の項で、筆者の思いを取り扱うことにしたい。

## V

人には、誰しも、人生の「物語」（ストーリー）がある。

引き算や足し算を繰り返しながら、人生の「物語」（ストーリー）はつむがれる。

この世にいのちのあるかぎり生き続け、そして呼吸が止まり心臓の鼓動が絶える瞬間まで、鮮烈な〈生〉の意味を思索しながら生き続けることが重要である。

どんな時代、どんな社会的状況であろうとも、何よりも大切な人間の〈いのち〉の価値を伝え、人間としての尊厳を伝える情報は、決して軽視されるべきではない。

今回の小著の改訂版では、基本的には、冒頭でも述べたとおり、情報学領域の研究及び情報通信技術（ICT）は飛躍的に向上し、多彩な情報メディア機器が世に出され、情報メディアの利活用の方法や手法も多様化し大きく変貌していることから、小著全体を通読して、十分とは言えないまでも、現代の社会、そして、情報や情報メディアを取り巻く状況などを可能な限り反映すべく、各章・各節・各項目の必要な個所についての記述や内容などを改めた。

今回の改訂版において、全体的に最も改めた章が第7章である。

もともと、初版第7章は、〈高度情報社会の近未来を考える〉というタイトルのもと、第6章までの展開の総まとめ的な意味あいをこめつつ、「高度情報社会」と称する現代社会の近未来の姿について、三人称でも二人称でもなく、一人称の「あなた」について、すなわち、小著の読者個人の視点での情報や情報メディアについて検討し、読者個人がいのちを置く社会の近未来の姿について展開した。



しかし、今回の改訂版においては、第7章のタイトルを〈豊かな人生の物語を生きる〉とした。

それは、初版第7章の展開内容が、決して現代的な事象と乖離しているという理由からタイトルとその展開内容を改訂したというよりも、小著の最後で最も語らなければならないのは、より豊かな生命力のあふれた人間の“生きている言葉”ではないのか、大切な〈いのち〉を数える言葉ではないのか、いいかえれば、人間の大切な〈いのち〉についての情報を語らなければならない、と初版以降において強く思ったからである。

そしてまた、改訂版第7章では、第1章から第6章までのように、あえて、「情報」や多彩な「情報メディア」という言葉をほとんど用いることをしていないことも、初版第7章と大きく異なっている。

その理由は、小著の中でも記しているが、まず、筆者としては情報や多彩な情報メディアなどについては、とうてい十分とはいえないまでも、第1章から第6章において必要な内容は書きあらわすことができたこと、次に、情報や情報メディアを利活用するのは、他でもない「人間」であり、その人間のいのちの価値、人間としての尊厳、そして人生の生き方への思索なしに、自分自身のため、愛すべき他者のため、そして社会のために情報を「生きる力」とすることはできないのではないのか、という考え方からである。

すべての人間は、その存在そのものが誰かに影響を与えている。そして、心から喜び、生きる姿は意識的、あるいは無意識的に、身近にいる人たちに勇気と希望を与え、さらには多くの人間を突き動かし、そのことが近未来の社会をより良い方向へと変えていく。小著の読者には、そのようなより豊かな近未来の姿を心に描いてほしいという願いも込めてみた。

人間の一生は、ただ一度だけである。どんなに財宝を積んでも、時間を戻すこともできなければ、二度目の人生を手に入れることもできない。人生にリハーサルがあれば、失敗や後悔のない歩みが可能であるかもしれないが、実際にはそうはいかない。毎日の人生が「本番」の連続である。右にそれたり、左にそれたり、思いどおりに進まないことも多いのが、私たちの人生である。

そのためにも、与えられた、みずからの大切な〈いのち〉を丁寧に扱い、“そのままの存在”としての自分を愛し、自分の個性を最も美しいと思うことである。「いま（現在）」存在する一人ひとりの〈いのち〉には、「過去」に生きた人たちの大切な〈いのち〉が含まれ、また「未来」に続く、何にも代えることのできない〈いのち〉もやどしている、といえる。

変わりなくこの世が続くためには、過去を乗り越えて、いま（現在）、そして未来を見すえて進んでいく、その日その日を精一杯に生き続けようとする人間の輝きののちの営みが必要である。人の人生を悔いることなどないのだ。

いずれやってくる「死ぬ時」まで、多くのいのちの交わりの中で豊かな人生を楽しみ、そしてこころの豊かさを味わい、長い人生で得ることのできた英知、情愛、そしてさまざまな経験を次の世代に伝えていくことは、個々の人間にとっても、人の社会全体にとっても望ましいことであるだろう。

誰もが、過去を悔やむことなく、しがみつかず、いつも明るく前向きに、目には見えない未来にワクワクした気持ちで生きてほしい。そんな気持ちを心の内に秘めて著わしたのが、この改訂版の第7章である。

## VI

自然界には、予期できない突然の地震やはげしい風や嵐がある。

同じように、私たちが精神的に成熟した人間として成長する過程（プロセス）の中では、時には、予期できない、困難や苦難という大風や大波によって心がみだされたり、希望の丘が深い濃霧によって見えなくなるなど、いろいろな出来事に遭遇する場合がある。

しかし、先に述べたように、どんな場合や状況においても、人間に本来備わっている〈生きる力〉をますます強め、解決困難な出来事や壁を乗り越えるための助けとなるのが、正確で有益な「情報」である。

現在の高等学校における共通教科情報科は、「社会と情報」、「情報の科学」からの選択必修であるが、令和4年度（2022年度）の1年生から実施される新高等学校学習指導要領では共通必修科目「情報Ⅰ」が新設され、指導内容がより充実したものとなる。文部科学省ホームページには、共通教科情報科の指導の充実などに向けて、「高等学校情報科に関する特設ページ」を設けて、研修用教材などのコンテンツを一元化して公開している<sup>†</sup>。また、中学校でもパソコンを扱う授業が設けられており、「情報」に関する理論的な内容や技法についても、従来と比較して格段に学ぶ機会が増えたことから、中学校や高等学校の先生方、とりわけ、学校で情報科関連の授業をご担当の先生方にも、是非、小著を手にとっていただければと考えて

<sup>†</sup>（高等学校情報科に関する特設ページ）

URL : [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/1416746.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1416746.htm)

いる。

あわせて、小書は、大学における講義テキストとして活用されるだけでなく、これから大学で学ぼうとする高校生の方たちにも手にとって読んでいただきたいと考え、漢字へのルビも多くし、できるだけ平易で、読みやすい内容を心がけたつもりである。

筆者としては、一人でも多くの方が本書を手に取り、まず、情報や情報メディアなどについての基本的な知識と理解を得て、さらにさまざまな視点から現代の社会、人間の生き方、いのちの価値を深く捉え、〈生きる力としての情報〉について考えていただけるようになれば、小書をあらわした意味も大きいと考えている。さらにまた、本書の改訂版を手にした方が、いつも、どんな時でも、〈生〉と〈死〉に対する喜びと希望の<sup>ヴィジョン</sup>洞察を持ち続けてほしいと願っている。

どんな時にもどんな場でも、恐れと不安と悲しみに別れを告げ、自信と勇気と覚悟を決め、生き方に安堵と平安と希望のうちに自分の人生をいつも前向きに、丁寧に、何事にも負けないで勇敢に、自分だけの大切な人生の「物語」（ストーリー）を生きていただければと願うばかりである<sup>‡</sup>。

---

<sup>‡</sup>筆者のメールアドレス

G-mail： [mnorio1956@gmail.com](mailto:mnorio1956@gmail.com)

Outlook： [m-norio\\_1956@outlook.jp](mailto:m-norio_1956@outlook.jp)

